巻　頭　言

副院長　大　森　睦　子

我々は医学を生業とする科学者である。今だ解明されていない病態生理に対してメカニズムを考え、また太古からの人類の進化の謎に満ちた生命科学に対しての謎を解き明かし、病気を治し患者の命を救うという医学的好奇心に満ち溢れている。我々は基礎、臨床を問わず、あくなき探求心、真実を知りたいという科学的心を満たすべく日々精進している。そしてそれは pure な心で、私利私欲ではなく pure に真実を追い求めなければいけない。我々が求めるのは真実であり、結果は人類に貢献するはずである。

この姫路赤十字院内雑誌も学術論文誌である。STAP 細胞の論文不正問題や、最近多発する様々な基礎研究、およびバルサルタン事件のような臨床研究不正事件で、日本人研究者の倫理的な問題が議論されている。そもそも、科学者は不正行為をしてはいけないことは十分に知っている。カンニングをしてはいけないし、他人のものを盗んではならない、他人を傷つけてはならないことは、幼い頃に誰もが学ぶ。臨床医学も含め科学研究は、基本的に性善説でなりたっており、従来は論文撤回といっても意図的ではない単純ミスによるものがほとんどだと考えられていた。研究者が虚偽の論文をだしてくることは想定外で、研究者同士のお互いの公平な評価という信頼関係で科学研究の世界は構築されている。

しかし、過去の撤回論文のうち、単純ミスが原因とするものは 21.4% に過ぎず、43.4% が捏造、14.2% が重複投稿、9.8% が盗作によることが判明している。しかも捏造に関して世界の中で日本は第３位とされている。日本は捏造大国として海外から評価されても不思議でない状況となっている。

当病院では基礎研究は無く、もっぱら臨床研究である。統計の取り方とか思わぬところに不正があるかもしれない。臨床研究の不正と、「STAP 細胞」論文のような基礎研究の不正問題とは同じではないかもしれない。しかし、臨床研究も、基礎研究も、扱う対象がヒトであるか、細胞であるかの違いはあっても、どちらの最終目的も、病気や生命の仕組みを解き明かすことにある。したがって、基礎研究の不正も、臨床研究の不正も同罪である。

当院にも倫理委員会があり、論文になる前、臨床研究を始める前には倫理委員会を通すが、できあがった論文の倫理性、安全性、科学性に問題がないか審査することは行っていない。

専門分野が違う人による評価や検証は不可能である。

悪質な研究不正を pure な科学者がするとは思えないが、論文などの不正はなかなか後を絶たない。人間の自然な性質からすると、不正を根絶することは難しく、研究者に対する教育と研修、規則の制定と実行、よき指導者の育成、研究者の監査と監視、不正に対する調査と報告の実施が必要である。研修医に教えるカルキュラムは無い。

もちろん、我々臨床医には確かな知識と技術が必要である。医学を生業として生きていくための Phyrosophy とさらに、医学に対する Passion も求められる。医者は他人に優しくなければならなく、強靭な power も必要と考える。そして虚偽のない真の科学者とならなければならない。

この巻頭言の半分は医療ガバナンス学会メールマガジンからの切り貼りです。

参考文献

メールマガジン

NO170　起こるべくして起きた高血圧治療薬バルサルタン事件
ときわ会常盤病院　　谷本　哲也

NO187　米国史上最悪の「科学研究不正」の反省と対処に学ぶこと
ハーバード大学　　大西　睦子

N0199　ノバルテス疑惑、独禁法適用の可能性　厚労省にとって「最悪の事態」も
態原総合コンプライアンス法律事務所　　郷原　信郎